

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-151	14-003	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
The Alcohol Paradox: Light-to-Moderate Alcohol Consumption, Cognitive Function, and Brain Volume. アルコール・パラドックス：軽度-中等度飲酒、認知機能及び全脳容積		
執筆者		
Davis BJ, Vidal JS, Garcia M, Aspelund T, van Buchem MA, Jonsdottir MK, Sigurdsson S, Harris TB, Gudnason V, Launer LJ.		
掲載誌		
J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2014 Dec;69(12):1528-35. doi: 10.1093/gerona/glu092.		
キーワード		PMID
認知機能、全脳容積、パラドックス		24994845
要 旨		
目的： 高齢者における検討において、軽度-中等度飲酒は、認知機能と正の相関、全脳容積と負の相関を示すことが報告されてきた。通常、認知機能は全脳容積と正の相関を認めることを考えると、この現象はパラドックスといえることができるであろう。今回、認知機能障害を認めない 1907-1935 年生まれの一般住民男女 3,363 名を対象とした前向きコホート研究 Age Gene/Environmental Susceptibility-Reykjavik 研究において、全脳容積、全認知機能及び飲酒量との関連を検討したので報告する。		
方法： 質問票により、飲酒状況及び飲酒量を評価した。一連の認知機能試験を用いて全認知機能の評価した。頭部 MRI 用いて全脳容積を定量し、頭蓋内容積で補正したものを解析に用いた。		
結果： 女性の飲酒者では、非飲酒者に比べて全認知機能スコアが高かった ($P<0.0001$)。また、飲酒量と全認知機能スコアとの間にも正の関連を認めた。これらの関連は、心血管病危険因子を調整しても変わらなかった。このような関連は、男性では認めなかった。男女ともに、飲酒と全脳容積との間に明らかな関連を認めなかった。飲酒習慣と認知機能との関連は、飲酒習慣と全脳容積との関連と有意に異なっていた ($P<0.001$)。飲酒のカテゴリー別にみた検討では、すべてのカテゴリーにおいて全認知機能スコアと全脳容積との間に正の関連を認めた。		
結論： 飲酒習慣と認知機能との関連は、飲酒習慣と全脳容積との関連と異なっていた。これは、飲酒者において全脳容積に比較して認知機能を良好に保つような未知の交絡要因の影響かもしれない。一方、多量飲酒者では、何らかの原因により全脳容積が低下するのかもしれない。		